

論説

中川重麗著『博物学階梯』の諸本と構成 (読本・教授本・字解)

蓮 井 理 恵
安 部 清 哉

1. はじめに

明治時代初期は政治や経済、工業など多くの近代化が進んだ時代であり、教育制度もその一つである。東京書籍株式会社社史編集委員会編（1980）、海後・仲・寺崎（1999）でも述べられているように、特に明治時代の最初期は、西洋の先進的な自然科学の概念を取り入れることが急務であった。そのような時代を背景として、中川重麗^{しげあき}による『博物学階梯』は明治10年より改訂を重ねながら出版された。中川は『博物学階梯』において当時としては新しい漢語を少なからず用いており、日本語学の観点から注目し値する資料となっている。しかし、中川重麗自身の研究は鈴木栄樹氏などにより行われているが、語彙研究において中川重麗並びに彼の階梯を中心として取り上げたものは、本稿末の「参考論文」に挙げているようにごく僅かである。

そこで本稿では、中川重麗による『博物学階梯』の書誌情報をまとめ、どのような構成のものかを整理していくとともに、『博物学階梯』の近代日本語史資料としての価値について述べる。

なお、本稿で取り上げる『博物学階梯』の内、明治11年4月『小学読本 博物学階梯教授本』、明治11年12月『小学読本 博物学階梯字引』、

明治12年11月『改正博物学階梯字解』、明治13年6月『改正増補博物学階梯教授本』の四冊は国立国会図書館デジタルコレクションに公開されているものを使用した。その他の二冊は、安部清哉所有のものを使用している。

また、『博物学階梯』の「学」は旧字体「學」が用いられているが、各版で少しずつ異なる異体字が用いられている。さらに、「學」以外の漢字でも異体字が複数用いられているため、本稿では便宜上、一連のシリーズを総称するものとして『博物学階梯』と記す。

2. 『博物学階梯』の時代背景

2. 1. 『博物学階梯』と同時期の近代教科書の時代背景

日本における教育制度の近代化が決定的となったのは、明治4年(1871年)の廃藩置県を経た翌明治5年(1872年)の「学制」発布である。新政府は、明治維新の頃から教育制度の制定に向け計画を公示していたが、発布を受け教育の近代化がいよいよ始まったわけである(東京書籍株式会社社史編集委員会編(1980)、文部科学省「学制百年史」などによる)。

全ての者を均しく八年制の小学校に入学させて初等普通教育を授けるという点が近代教育の基本となっており、小学校卒業後も中学、大学と学ぶ機関を設けた。小学校が国民皆教育を実現する拠点となることから、中学、大学よりも小学校の設立が急務であった。当時の小学校の中には、江戸時代の寺子屋、私塾、藩の学校などを小学校へと移行させた例も少なくない。

当時の文部省は、近代的な国民教育を目指すうえで学科目、教育の要旨、教科書名について教則を作り指示した。江戸時代から用いられてきた往来物の教科書の内にも使用が許可されたものがあったが、多くは明治維新後に編集された新たな教科書であった。これは、各府県において作成された小学教則でも同様である。近代的な学校は欧米の文明国を模範としており、そこで

用いられる教科書も当然欧米の教科書と同様の趣旨で編集されたものが求められた。つまり、近代日本の最初期の教科書は、欧米の教科書の翻訳ないし翻案により編集されたのである。中でも、博物学・物理学・化学といった理科系の教科書は、往來物の教科書にはない西洋の概念を取り入れるため、初期の多くの教科書は必然的に欧米の教科書を翻訳したものとなった。

文部省による出版物は、明治5年出版の片山淳吉『物理階梯』のように、現在でも名が知られているものが複数ある。一方、当時は民間でも自由に教科書として刊行することが可能であり¹⁾、中川重麗による『博物学階梯』も、近代教科書の創世記に出版されたものであった。

後に詳述するように、『博物学階梯』は京都府の上京区、現在の京都市において出版され、中には京都府蔵版のものもあるため、厳密には民間とも言い切れない。東京書籍株式会社社史編集委員会編(1980)、清水貞夫(2015)によると、京都市では明治維新後、市民によって初等教育のための小学校が開設され、後に京都府により中学校が開校、小学校教師への教育や教師志願者への試験が行われたという。京都市学校歴史博物館編(2016)、京都市教育委員会・京都市学校歴史博物館編(2017)では、京都市が学校、特に小学校教育に力を入れていた背景として、江戸時代末期の禁門の変(1864年)に端を発する混乱と、明治維新による天皇らの東京奠都に起因した経済的・精神的荒廃があるとしている。文部省による官立師範学校の東京設立が明治5年であることと比較しても、京都市は早い時期から学校教育に力を入れており、その中で教科書として『博物学階梯』が用いられた意味は大きいであろう。

2. 2. 「博物学」の学術的背景

『博物学階梯』の紹介に入る前に、博物学について簡単に触れておきたい。博物学史は上野益三(1973)などに詳しいが、上野益三(1984b)、西村三郎(1999)によると、「博物学」ないし「博物誌」という語自体は古代

に中国から伝来し、英語の“natural history”の意で用いられるようになったのは明治時代になってからであるとのことである。『日本国語大辞典』第二版（以下『日国2』）で「博物」「博物学」を引くと、それぞれ次のように記述されている。

「博物」

(1) ひろく物事を知っていること。物知り。

*本朝文粹〔1060頃〕三・論運命〈大江朝綱〉「揚執戟之博物奇才。長疲下位」

*鹿苑日録 - 明応八年〔1499〕八月六日「荷物日本之直、有博物之人而定其直、以其十分一納之於寺也」

*談義本・根無草〔1763～69〕後・二「張華も博物（ハクブツ）の看板をおろし、東坡も相感志の店をたたむ」

*博物新編訳解〔1868～70〕〈大森秀三訳〉一・気機「西洋国に自ら気機の法あり、博物の者日に以て気を測り、漸くに地気の大なる用を知れり」

*春秋左伝 - 昭公元年「晉侯聞子産之言曰、博物君子也」

(2) 「はくぶつがく（博物学）」の略。

*米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一三「博虫課は、農事博物のことを掌り」

*破戒〔1906〕〈島崎藤村〉一一・三「長野の師範校に居る博物科の講師の周旋で」

*三四郎〔1908〕〈夏目漱石〉三「左手には少し退がって博物（ハクブツ）の教室がある」

(3) 明治、大正、昭和初期までの小学校、中学校の動植物・鉱物を内容

とする教科の名称。

- * 小学読本〔1884〕〈若林虎三郎〉五「博物とは動物植物金石に関し
適当に記載致し候ものにて、所謂多く禽獸草木の名を知り兼ねて其
性質効用等をも明にするを得る学科に御座候」

「博物学」

もと、動物学・植物学・鉱物学・地質学などの総称。天然物全体にわたる知識の記載を目的にする学の意。博物。

- * 公議所日誌 - 八上・明治二年〔1869〕四月「科目は、実地適用を
主とし、和学、漢学、〈略〉医学、博物学の類たるべし」
- * 改正増補物理階梯〔1876〕〈片山淳吉〉一・総論「万物の外面形状
を記載し以て其類別を詳論するは博物学の要なり」
- * 灰燼〔1911～12〕〈森鷗外〉一九「新聞国の人民を類別して、博
物学の叙述のやうに書いた」

「博物」が指し示す意味は第一義として「ひろく物事を知っていること」と大変広いことが見て取れる。それが、自然科学である動物・植物・鉱物・地質に限定され、『博物学階梯』に繋がっていくのであるが、日本における博物学の素地として看過できないのは、陶弘景による『神農本草經集注』を始めとした、古代中国で生まれた本草学という薬物学の伝来である。西村（1999）によると、「〈本草〉は中国伝来の言葉」であり、元来は「根やドングリをつけるもの、つまり植物のことだったが、西暦前一世紀、中国史上の前漢末のころまでには、」薬剤や薬物を指すようになり、東アジアの漢字文化圏で広く用いられるようになった。「本草学」は、植物に限らず薬効のある自然物を研究する学問であったといえる。

やがて、明の李時珍による『本草綱目』が日本に輸入される。徳川家康に登用されていた林羅山が慶長12年（1607年）にこれを入手すると、従

来の分類法である三品分類を廃した新たな配列・分類や、記載事項の新しさ、種類の多さなどが伝わり、日本における本草学ならびに博物学が大きく成長することとなる。貝原益軒『大和本草』などのように、『本草綱目』を参考ないし底本としながら、日本においても本草書が編纂され始めた。江戸時代には博物学が大衆化し、博物趣味が流行するなど、同書は3世紀近くにわたり、日本で影響力を示し続けたのである。

時代は下り、西洋から博物学者が来日するようになったり、日本人が西洋の学問を取り入れ、出版するようになる。文政12年(1829年)には、ツェンペリーの『日本植物誌』における学名に和名を当てはめた伊藤圭介『泰西本草名疏』が刊行され、同書の中でカール・リンネの二十四綱植物分類式や二名法による学名なども紹介された。

宇田川榕菴が登場するのもこの頃である。矢部一郎(1984)によると、宇田川榕菴(1796～1846)は二十歳の年に『ショメール百科辞典』に出会い、「初めて西欧近代植物学を知ったという。そして、植物学が医学や薬学の基礎であることを知った」のである。その後文政5年(1822年)に『菩多尼訶経』を記し、「葯」などのように現在でも用いられるような訳語を多々作った。彼は『植学独語』において、本草学と植物学は異なるものであると言及している。中国における本草学は、薬用とすべきものであり、植物学は有用、無用を問わずに植物全てについて研究する学問であるという。さらに、宇田川榕菴は、西欧の博物学を「三有究理学」として捉えている。それは、「動学」(動物学)・「植学」(植物学)・「山物の学」(鉱物学)であり、先述のリンネ分類を賛美していた。また、『植学啓原』巻之一「学原」において、「ヒストリー」、ここでの博物学について「形状を記録し、種と属を見分ける。思うに弁別の学である」と述べている。

宇田川榕菴のように、本草学と博物学としての植物学を区別する²⁾立場は江戸時代後期にはまだ多くなく、蘭学者以外の者による博物学的本草研究が盛んであった。やがて、科学啓蒙教育は民間塾等でも行われるように

なったが、明治時代初期に博物学を積極的に担ったのは文部省博物局であったという。

3. 中川重麗と『博物学階梯』について

3. 1. 中川重麗の略歴（明治時代初期）

『博物学階梯』の諸本（テキスト・語彙集・教師用教授本、および、それらの改正版）は、明治10年から明治13年の間、京都出身の中川重麗（1850～1917）によって著された、明治初期における博物学の入門書である。中川は多岐にわたって活動しており、教育者、理化学者、ドイツ語の翻訳家の他、少年文学・雑誌の著述刊行者、美術評論家でもあり、俳人でもあった。

清水貞夫（1996）によると、中川は明治3年の二十歳の頃に東京の安井息軒の三計塾に学んでいたが京都に戻り、明治4年から明治7年まで欧学舎独乙校にてドイツ語を学んだ。欧学舎独乙校は、京都府が明治政府から移管されて明治3年に開校した仮中学校の一機関であり、洋学が教授される場であった。独乙校の教師はドイツ人のルドルフ・レーマン（Henning Rudolph Ferdinand Lehmann, 1842年10月15日～1914年2月4日）であり、彼から中川はドイツ語のみならず、理科、博物、数学なども学んでいたようである。やがて明治8年に中川は京都府庁に出仕し、勸業課、学務課に配属となるが、その中で小学課に物理書を増やすよう提言し、許可を受けている。明治11年には京都府師範学校助教も兼務し、さらに同年、理科教育を指導するため「萬有家塾」を開いてドイツ語、理科並びに博物学を教えていた。この前後の時期に『博物学階梯』の諸本は準備された。その後中川は、明治17年に東京大学予備門御用掛を担うこととなっている。

3. 2. 『博物学階梯』について

明治初期における理科系の教科書は欧米の教科書の翻訳が多数であることを前述したが、『博物学階梯』も例外ではなかった。明治11年4月出版の『小学読本 博物学階梯教授本』緒言には次のように記されている。

〔(略) 其鮮釋ハ之レヲ獨逸國「シュードレル」氏ノ博物書ニ取り敢テ一言一句モ苟モセスト雖モ厘々タル公暇ヲ以テ匆々數日ノ間ニ編輯シタル者ナレハ固ヨリ謬誤ナキヲ免レサルヘシ況ンヤ遺漏ニ於テヲヤ伏シテ・・・(略)〕

中川はドイツ人であるフリードリヒ・シュドレルの“Das Buch der Natur”を邦訳した『万有七科 理学』（全5巻）を明治10年から明治12年に著している。それゆえ、上記記載とも併せると、『博物学階梯』はシュドレルの“Das Buch der Natur”に基づきながら翻案した教科書かと推察される。しかし、出典に関する情報は日本語学関連からは不明であるため、現在、調査中である。なお、『万有七科 理学』の冒頭「凡例」には次のようにある。

「此書ハ獨乙ノ碩學「ドクトル、フリードリヒ、シュドレル」氏ノ著ス所紀元一千八百七十四年
ノ改板ニシテ原本題シテ「ダス、ブーフ、デル、ナツウル」ト曰フ蓋シ萬有之書ノ義ニシテ理学
星學化學ヨリ鑛學植學及ヒ動學ニ至リ懇々
説論シテ復タ遺漏アルコト³⁾ ナシ而シテ皆其萃
ヲ摘拔セシモノナリ」

この“Das Buch der Natur”は2巻にわたって著された。稿者が入手した1874年出版の第1巻は“Physik”“Astronomie”“Chemie”，つまり物理学、天文学と化学について述べられたものである。第2巻は、現時点ではまだ入手確認ができていないのであるが，“Mineralogie”“Geologie”“Botanik”“Zoologie”“Physiologie”，つまり鉱物学、地質学、植物学、

動物学と生理学を述べているようである。『万有七科』では、「現象学」と「物体学」に大別し、前者に「理学（＝物理学）」「星学（＝天文学）」「化学」「生理学」を、後者に「鉱物学」「植物学」「動物学」を分類しており、地質学を除いた七学問を対象としている。後述するように、中川の『博物学階梯』の構成は「鉱物」「植物」「動物」であり、『万有七科』の「物体学」の三分類と一致し⁴⁾、“Das Buch der Natur”第2巻が参考にされていると考えられるが、それについては今後調査していきたい。

さて、中川の『博物学階梯』は、明治10年（1877年）の『小学読本博物学階梯』に始まり、その「改正」版、そして各々の教授本と語彙集である「字引」（改正版では「字解」と記載される）と、合わせて6冊が明治13年までに出版されている。

なお、同じ「博物学階梯」の名で、明治14年に能勢栄が『小学読本博物学階梯』を、翌15年に三宅捨吉がそれに対する『博物学階梯字解』を出版しているが、中川との関係は定かではない。

明治10年に『小学読本 博物学階梯』が出版されると、翌11年4月には教師向けの『小学読本 博物学階梯教授本』、同年の12月には『小学読本 博物学階梯 字引』が続けて出版されている。「教授本」は本文の他、教師が説明するにあたり補足が必要であろう事柄が割注形式で記されたものであり、教師用指導書といえる。

「字引」は階梯に出現する専門用語や説明が必要であろう語を集めた用語集である。この『小学読本 博物学階梯 字引』には緒言があり、中川が編集した『博物学階梯』が京都府の小学課業において使われており、生徒のために教授本から語句の一部を取り出し、図を挿入して勉強しやすいようにしたと述べられている。さらに、「植物」「動物」の図は欠けているものが多いため、いずれ出版する増補版を待つようにとも述べられている。

予告された「増補版」に該当すると解せるのが、明治12年に出版された『小学読本 改正博物学階梯』である。その2か月後には、先述の「字引」

と同様、用語集である『改正 博物学階梯字解』が刊行され、明治13年には『改正増補 博物学階梯教授本』が出版されている。

このような『博物学階梯』の諸版について一覧にまとめたものが次の表1である。

【表1】中川重麗著『博物学階梯』諸版 書誌一覧

番号	書名	刊行年月 (和暦)	刊行年月 (西暦)	略号
1	小学読本 博物学階梯	明治10年11月	1877年11月	AT
2	小学読本 博物学階梯教授本	明治11年4月	1878年4月	AM
3	小学読本 博物学階梯字引	明治11年12月	1878年12月	AL
改正版 1	小学読本 改正博物学階梯	明治12年9月	1879年9月	BT
改正版 2	改正 博物学階梯字解	明治12年11月	1879年11月	BL
改正版 3	改正増補 博物学階梯教授本	明治13年6月	1880年6月	BM

これらは、「教科書—教授本—語彙集（＝字引・字解）」という三冊で一組になっており、最初の教科書の版の一組（上掲の1～3）と、「改正」された改正版の一組（上掲の「改正版」1～3）の二組が作成されたことが分かる。但し、「改正版3」の教授本において、名称が「改正」ではなく「改正増補」とされている理由は不明である。また、「改正版2」は、初版での「字引」から「字解」に変更された理由は定かではないが、後述するように、2番では「字解」が用いられており、先に出版された「字解」に文言を統一した可能性は有り得るであろう。

「略号」は本稿での便宜上の略称である。「初版」三種をA群、「改正版」三種をB群とし、「教科書」版は“Text”の頭文字T、同じく「教授本」は“Manual”のM、「字引」「字解」は“Lexicon”のLで示した。例えば、『小学読本 博物学階梯』はA群の“Text”の意味でATと示した。

なお、海後宗臣編（1965:463-478）『日本教科書体系 近代編 第二十一卷 理科（一）』講談社には、1番AT『小学読本 博物学階梯』の翻字が収められている。

4. 『博物学階梯』の表題等の構成

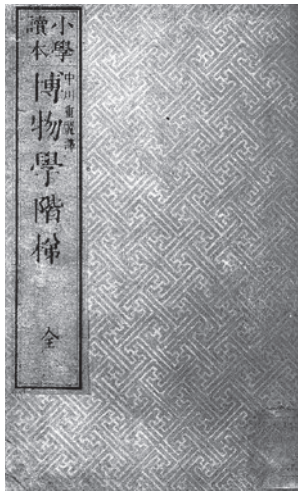
本章では、表1で見たAT・AM・BT・BMの四書に関して、表紙、中扉、概ね本文一丁表の一行目並びに本文最終行、奥付の記載情報をまとめ、比較する。初めに、それぞれの原本画像を示す。

4. 1. 『博物学階梯』四書の原本画像

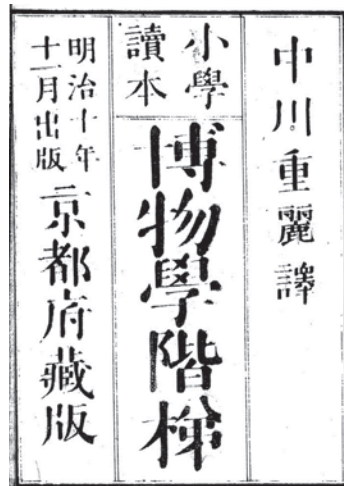
4. 1. 1. AT：『小学読本 博物学階梯』（明治10年）

まず、次の図1～図4は、ATつまり『小学読本 博物学階梯』（明治10年）の原本画像である。

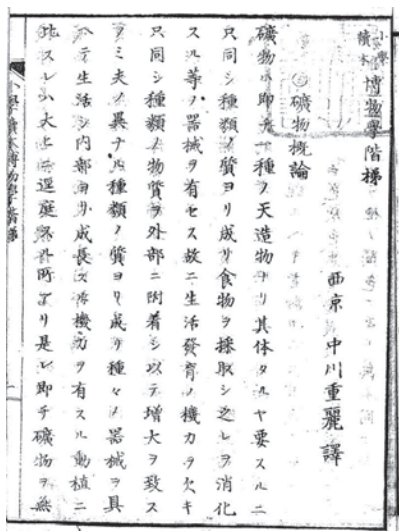
【図1】AT：表紙



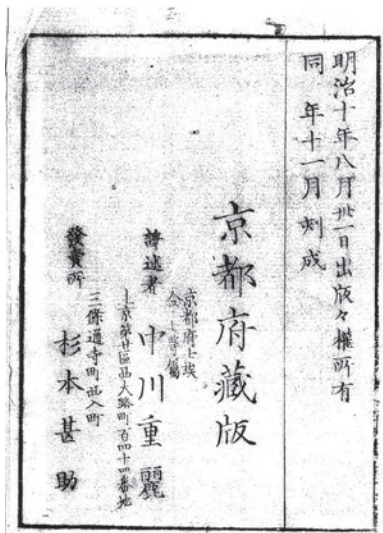
【図2】AT：中扉・本文一丁表



【図3】 AT：本文一丁表



【図4】 AT：奥付



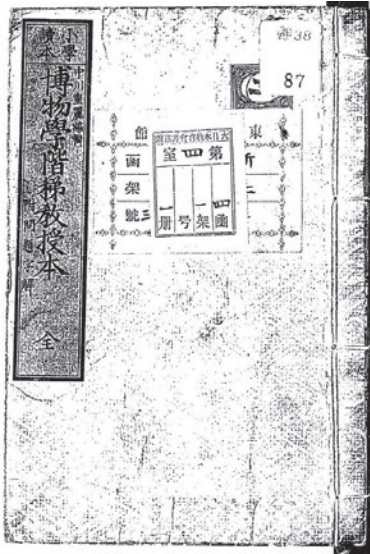
図中の情報は後述するため、本節では表記に着目する。「小學讀本」の「學」は表紙と中扉、二頁と本文最終頁の最終行がそれぞれ同じ字であり、合わせて二種類の字が使われている。「讀」は、本文最終行以外は同じ字である。

「譯」という字は、本文最終頁以外の全てで登場し、全て同じ異体字である。「博」は、本文最終頁のみ「丶」が無い。「梯」は「學」と同様に、表紙と中扉、本文一丁裏と本文最終頁の最終行がそれぞれ同じ字であり、合わせて二種類の字が使われている。

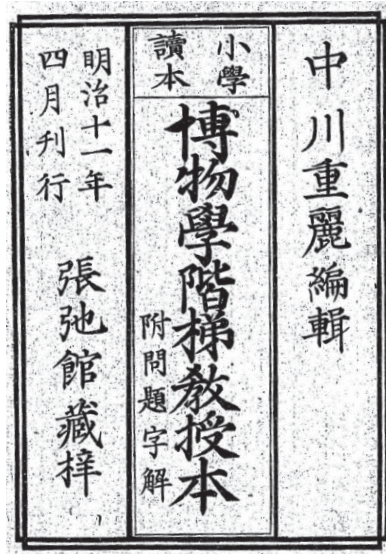
4. 1. 2. AM：『小学讀本 博物学階梯教授本』（明治11年）

図5～図8は、AMつまり『小学讀本 博物学階梯教授本』（明治11年）の原本画像である。なお、AMでは本文の前に「緒言」並びに「教授法大畧」があり、その末尾にも書誌が記載されているため、図7に取り上げる。

【図5】AM：表紙



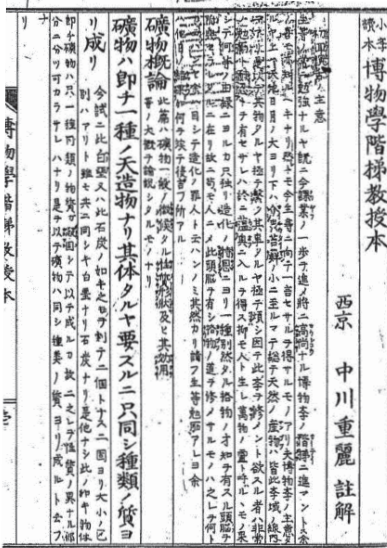
【図6】AM：中扉



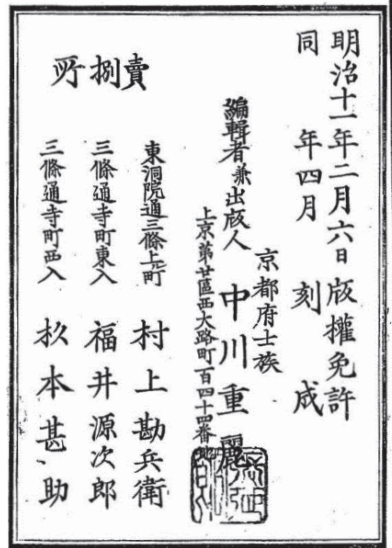
【図7】AM：「緒言」教授法大畧

<p>明治十年九月於張弛館</p> <p>註解者 識</p>	<p>○緒言</p> <p>一 此書ハ余力淺學ヲ顧ニス京都府第五課ニ在リ編輯セシ小學讀本博物學階梯ノ註解ニノ讀本中ノ旨簡ニシテ初學者輩ノ專ラ訓導ノ說明ヲ要スル章句ニハ應テ其解釋ヲ附シ以テ此教授本一冊子ヲ成セリ固ヨリ其解釋ハ之レヲ獨逸國「シュドレル」氏ノ博物書ニ取リ敢テ一言一句セ均セセスト雖モ屢々タル公暇ヲ以テ勿々數日ノ間ニ編輯シタル者ナレハ固ヨリ誤謬ナク免サルベシ況ンヤ遺漏ニ於テナク伏シテ看者ノ察正ヲ俟ツノミ</p> <p>○教授法大畧</p> <p>一 先ツ各生徒ヲシテ順序ヲ逐ヒ本書ノ句章ヲ分テ適宜ノ一章ヲ朗讀セシメ而シテ各其句章ニ就テ此書所載ノ說明ヲ授ケ其名稱及ビ語字等ハ之レヲ一々塗板ニ墨書シ畫圖ヲ要スルモノハ可及的ク簡明ニ之レヲ畫キ猫虎ノ區別判然ナラシムベシ此場合ノ目的ハ一途ニ生徒ヲシテ十分事物ヲ明解セシムルニアリ</p> <p>一 既ニ前日教授シタル處ハ下ニ附スル所ノ問題及ビ前日說明シタル事件ニ就テ問題ヲ起シ各生徒ヲシテ之レヲ明答セシムヘシ是レ此場合ノ目的ハ一途ニ生徒ヲシテ事物ヲ暗記セシムルニ在リ</p> <p>一 處々ニ記シタルニ物類似ノ件區別ノ件ハ一般ノ主概概則ヲ示スカ故ニ一層意ヲ此ニ鏡クシ說明ヲ密ニシ務テ比較認識ノ點ニ注目セシムヘシ是レ此場合ノ目的ハ一途ニ生徒ヲシテ事物鑒別ノ思想ヲ博トスルニ在リ</p>
--------------------------------	---

【図8】AM：本文一丁表



【図9】AM：奥付



表記の違いとしては、前節のAT同様に表紙のみ「博物学階梯 全」と「全」の字が入っており、「附問題字解」という文言は、表紙と中扉に記されている。また、表紙と中扉では「中川重麗編輯」とあり、本文一丁表では「西京 中川重麗 註解（解【牛→午】）」とあるように、「編輯」と「註解」の2語が用いられている。

「小学讀本」の「學」は表紙と中扉、本文一丁表と本文最終頁の最終行が各々同じで、合わせて二種類の字が使われている。「博物学階梯」の「博」「學」は、本文最終頁以外は同じ字で、「梯」は表紙と本文最終頁、中扉と一頁がそれぞれ、「教」は全て同じ字である。

4. 1. 3. BT：『小学讀本 改正博物学階梯』（明治12年）

続いて、図10～図13は、BTつまり『小学讀本 改正博物学階梯』（明治12年）の原本画像を取り上げる。

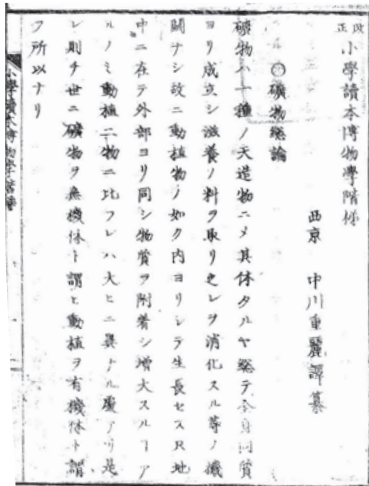
【図10】BT：表紙



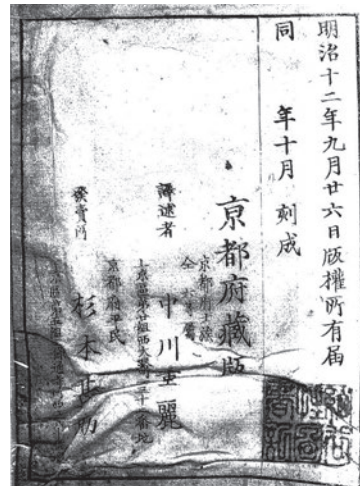
【図11】BT：中扉



【図12】BT：本文一丁表



【図13】BT：奥付



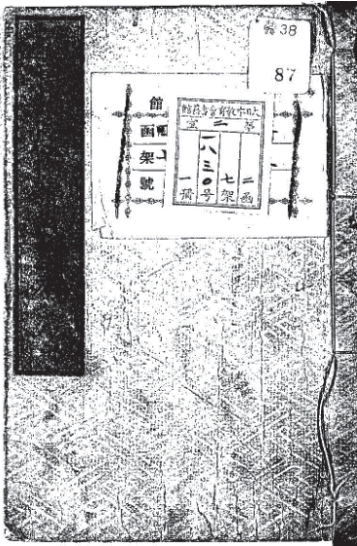
表記の違いとしては、AT、AM 同様に表紙のみ「博物学階梯 全」と「全」の字が入っている。また、表紙と中扉では「中川重麗譯」とあり、本文一丁表では「西京 中川重麗譯纂」とある。

「小學讀本」は、表紙のみ「讀」の間の「四」が「𠄎」となっている。「博物學階梯」の「博」は全て同じで、「學」も本文一丁表以外は同じ字が用いられている。

4. 1. 4. BM：『改正増補博物学階梯教授本』（明治 13 年）

最後に、図 14～図 18 として、BM つまり『改正増補博物学階梯教授本』（明治 13 年）の原本画像である。なお、本書は国会図書館データベース所蔵本に拠っているが、図 14 から分かる通り同本の表紙は黒いため読めず、図 15 が現時点における加工の限度であり、確実に判読できてはいない。

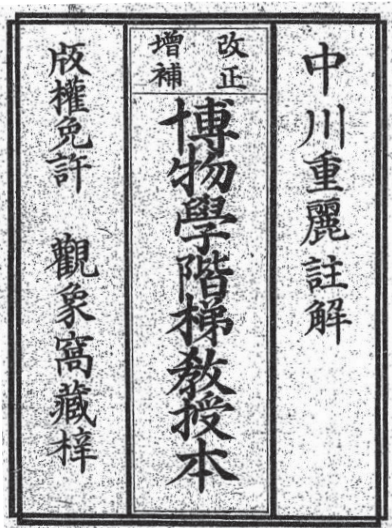
【図 14】 BM：表紙



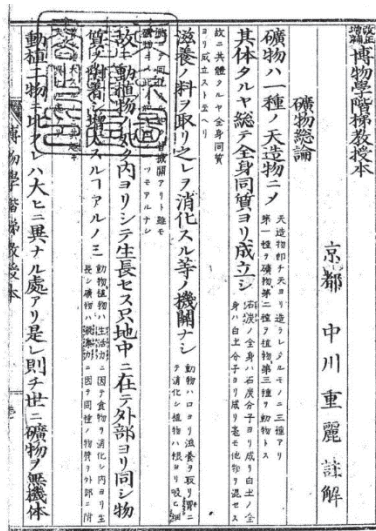
【図 15】 BM：表紙の加工版（表題のみ）



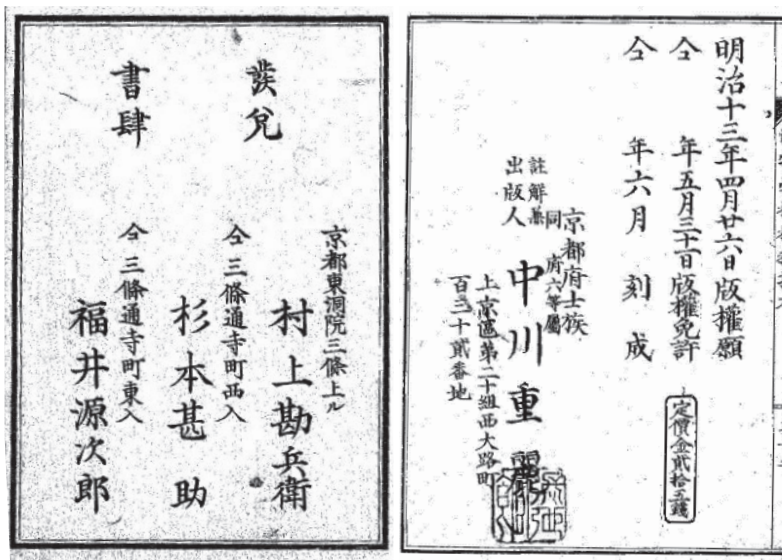
【図 16】 BM：中扉



【図 17】 BM：本文一丁表



【図 18】 BM：奥付



表記に関して、先述の通り、図 14 並びに 15 の表紙からは表題の確実な判読が難しく、「博物學階梯教授本」の右側は、他の書に則ると「中川重麗編輯」とも推察されるが、不確実のため断言は避ける。

そのため、表紙以外を見ると、「博物學階梯教授本」の「梯」が本文一丁表において、「教」が中扉において、「學」が本文最終頁においてそれぞれ異体字である。また、中扉も本文一丁表も「中川重麗註解」である。

4. 2. 『博物学階梯』四書の書誌情報の比較

前節においては原本画像を示し、主な表記の違いを述べたが、本節では原本画像の情報を簡易にまとめ、比較したい。なお、表 6 においては、基本的には常用漢字を用いているが、「學」と「孥」、「讀」、「教」と「教」のように、Word の漢字変換で出現する漢字は、原典に合わせている。

表 6 の四書比較において、表題を見ると分かるように、表紙・中扉・本文一丁表または裏・本文最終行の構成は四書ともほぼ同じである。例えば、表紙では「全」と付いていたり、本文最終行では本文の終了を示す「終」(AM のみ「畢」と付記されている。AM で「附問題字解」と付いているのは、AM のみ問題と字解が本文の後に収められているためである⁵⁾。BT では、中扉と本文最終行のみ「改正」という文言が無いが、中扉には出版年とともに「明治 12 年 10 月改正」と記されている⁶⁾。

表題の下に続くのは、中扉に記載の出版年月、奥付に記載の版權所有居年月日・出版版權所有年月日・刻成年月である。AT・AM・BT とも、中扉の年月情報は奥付の刻成に従っていることが分かる。BM の中扉には「版權免許」とのみ記載されており、年月は記されておらず、版權を有しているという情報が重視されたように思われる。

続いて、中川が各書をどのように定義しているかであるが、まず BM を除き「西京」の中川重麗に拠ると書かれ、BM のみ「京都」と改まっている。東京に対立して呼んでいたのが、何らかの理由によって明治 13 年に

【表6】『博物学階梯』四書の書誌情報

	AT	AM	BT	BM
表題 (表紙)	小學讀本 博物學階梯 全	小學讀本 博物學階梯教授 本 全 附問題 字解	小學讀本 改正博物學階梯 全	改正増補 博物 學階梯教授本
表題 (中扉)	小學讀本 博物學階梯	小學讀本 博物學階梯教授 本 全 附問題 字解	小學讀本 博物學階梯	改正増補 博物 學階梯教授本
表題 (本文一丁表ま たは裏)	小學讀本 博物學階梯	小學讀本 博物學階梯教授 本	改正 小學讀本 博物學階梯	改正増補 博物 學階梯教授本
表題 (本文最終行)	小學讀本 博物學階梯 終	小學讀本 博物學階梯教授 本 畢	小學讀本 博物學階梯 終	改正増補 博物 學階梯教授本 終
出版年 (中扉)	明治 10 年 11 月出版	明治 11 年 4 月刊行	明治 12 年 10 月改正	—
版權所有届等	—	—	明治 12 年 9 月 26 日 (版權所有届)	明治 13 年 4 月 26 日 (版權願)
出版版權所有	明治 10 年 8 月 31 日	明治 11 年 2 月 6 日 (版權免許)	—	明治 13 年 5 月 31 日 (版權免許)
刻成	明治 10 年 11 月	明治 11 年 4 月	明治 12 年 10 月改正	明治 13 年 6 月
著作の定義				
表紙	譯	編輯	譯	(不明)
中扉	譯	編輯	譯	註解
一丁表または裏	西京／譯	西京／註解	西京／編纂	京都／註解
奥付	譯述者	編輯者兼出版人	譯述者	註解兼出版人
身分・肩書	京都府士族 全 七等次屬	京都府士族	京都府士族 全 六等屬	京都府士族 府 六等屬
版元	京都府蔵版	張弛館蔵梓	京都府蔵版	觀象窩蔵梓
發賣所等	發賣所： 杉本甚助	賣捌所： 村上勘兵衛、 福井源次郎、 枚本甚助	發賣所： 杉本甚助	發兌： 村上勘兵衛、 枚本甚助 書肆： 福井源次郎

「京都」に変わったのであろう。

「階梯」であるAT・BTはいずれも「譯」としており、奥付では「譯述者」と記している。ただ、BTの一丁表のみ「編纂」の立場である。「教授本」であるAM・BMは一丁表または裏の「註解」を除き、それぞれ表現に統一性ないし関連性は見られるが、異なる表し方をしている。AMでは、表紙・中扉で「編輯」、奥付では「編輯者兼出版人」である。BMでは、表紙は確認できないが中扉では「註解」、奥付では「註解兼出版人」である。「譯」「譯述」は、原典と述べている“Das Buch der Natur”の翻訳としているためと考えられ、AM・BMで用いられている「出版人」もその名の通りである。この時代に関して、今野真二（2018）では、明治14年に伊藤圭介校閲、松村任三纂輯により出版された『植物小学』とその「緒言」に触れ、「纂輯」と「編輯」が類義語であるとしたうえで、「幕末には、何冊かの蘭書をアレンジして一つの書とすることも行なわれていた」と述べている。つまり、「譯」と「編纂」などには大きな違いがあるともいえる。では、「編纂」「編輯」「註解」の差は何であろうか。『日国2』を引くと、次のように述べられている。

「編纂」

いろいろの原稿や材料を集めて整理し、書物の内容をつくりあげること。
編集。

「編輯」

一定の企画のもとに、書籍・新聞・雑誌などをまとめること。また、その仕事。編纂。なお、著作権法上では、独立した複数の著作物を適法に一定の体系のもとに集録することをいう。

「註解（ちゅうかい）」

ある文章に注を加えて本文の意味を説明すること。また、その説明したもの。注釈。ちゅうげ。

BTの「編纂」は、AT並びにAMを改正するにあたり、シュドレルの著書以外の書籍等も参考にして編集作業がなされた可能性が示唆される。表紙、中扉では「譯」、奥付で「譯述者」と記しながら、一丁のみ「編纂」としているのは、京都府蔵版として著作権免許を得るために、あくまでドイツの書籍を翻訳したと示したかったためなのであろうか。

また、書の構成は後述するが、図8並びに図17を見ると分かるように、AM・BMは本文の中で割注が付されており、この割注部分が教師への補足事項であり教授本としての骨格である。そこで、AMでは本文の冒頭を「注解」とし、表紙等はATの関連書籍であることが分かるよう「編輯」としていると推察できる。BMのみ「小学読本」という文言が無く「改正増補」という形であるが、それ故に既に定まった文章に補筆しているという要素が強まり、「注解」に統一されているように思われる。これらの表現の違いは、今後各書の内容を精査し、原典等とも比較する際に検証したい。

表6に戻り、中川の「身分・肩書」を見ると、京都府の士族であり、明治10年に「七等次屬」であったのが明治12年に「六等屬」に変わっている点から、この間に昇級していることが分かる。

「版元」は、AT・BTの「階梯」は「京都府蔵版」で、AMは「張弛館蔵梓」、BMは「觀象窩蔵梓」である。3章でも述べたように、中川は明治8年から京都府庁に出仕していたことが、京都府という公的機関からの出版に繋がったのであろう。ただ、「張弛館蔵梓」「觀象窩蔵梓」の詳細は現時点において未詳である。

最後に、「發賣所」であるが、AT・BTはいずれも杉本甚助のみであり、AM・BMは村上勘兵衛⁷⁾、福井源次郎と杉本甚助の三人が携わっている。

このように、著作の定義や版元に不明点はあるものの、全体としてATとBTで一貫性があり、AMとBMでも差異はあるものの一貫性が高いことがいえる。

5. 『博物学階梯』の内容構成

前章においては、『博物学階梯』各書の表題の付し方等を概観した。本章では、各書の全体および内容がどのような構成であるか見ていきたい。なお、前章同様、AL並びにBLは性質が異なるため除外している。

5. 1. 書全体の構成

始めに、書全体の構成を概観すると、次の通りとなる。

5. 1. 1. AT：『小学読本 博物学階梯』（明治10年）

本文には割注やルビは無いが、所々に図が挿入されている。図は「第一圖 水晶ノ結晶形」のような形である。

三十帖から成る階梯本文終了後に、語の一覧が一帖半続く。この語の一覧を仮に単語集と名付けるが、単語が線で区切られ、恐らく中川が説明が必要だと判断した186語が列挙されている。単語集に図は無い。1語ごとに「語〔 〕右側ルビ、【 】左側ルビ、（ ）割注」という構成になっており、右側ルビは特に音読みを、左側ルビは意味の説明ないし訓読みを表す。

5. 1. 2. AM：『小学読本 博物学階梯教授本』（明治11年）

本文にはルビは無く、図も挿入されていない。本文中に逐一解説のように割注があり、割注は長いところだと本文2行に対し7行、つまり14行分記されている箇所もある。割注ではATと同じ使い分けによるルビが振られている。また、「図ノ第一」「石類塩類ノ区別」のように、枠外上部に補筆されているものもある。

冒頭に註解者である中川による「○緒【糸→糸】言」「○教授法大畧」があり、その後本文が二十九帖載せられる。その後に十三帖の図録、十帖の問題、五帖の字解が続く。本文・図録・問題・字解は通し番号が振られ

るのではなく、それぞれ一丁から開始する。

図録は「第一」から「第廿五」の十三帖半にまとめられており、一帖には単一ないし複数の図が記載され、数カ所にルビが振られている。続いて「博物學階梯 教授本問題」という見出しで十帖半にわたり問答が記されている。その構成は、問題の冒頭に注されているように、「○印ハ問△印ハ答ナリ而シテ問答共ニ稍密ニ涉ラント欲セハ読者宜シク註解ニ就チ参考スヘシ」⁸⁾ というものであり、「礦物概論」「土質」のように見出しが付されている。問題に図並びにルビは無い。最後に「博物學教授本字解」が五帖載せられ、部ごとに区切られて説明が必要と判断された語が列挙されている。字解に図は無い。字解の構成はATとほぼ同様である。例えば、「物質」は「物ノ成り立ツ原質」と下に書かれており、必要に応じて語釈が記されている。

5. 1. 3. BT:『小学読本 改正博物学階梯』(明治12年)

本文には割注やルビは無く、図も挿入されていない。

三十三帖半の階梯終了後、十帖の「小学讀本改正博物學階梯附圖」が続く。「府圖」は、鉱物の部に関する化石など六つの図が一帖に収められており、植物、動物、魚の順に示されている。同図においてルビとして振られているのは「忽布【ホップ】」の1語のみであり、他はルビとしてではなく、指し示す物体の読みとして片仮名が漢字と併記されている。単語集は無い。

5. 1. 4. BM:『改正増補 博物学階梯教授本』(明治13年)

本文にはルビが無いが、所々に図が挿入されている。また、逐一割注が記されており、最大7行、つまり14行分記されている。割注ではAT・AM・BTと同じ使い分けによるルビが振られている。

BMのみ頁数の振り方が他の三書と異なり、一丁(表・裏)ではなく、

洋本と同様の頁番号である。五十二頁の本文のみから成る。図に関して、図番号はないが、一頁の半分を割くものから、種々の「結晶体」のように一頁と三分の二ほどを割いているものまで様々である。単語集は無い。

5. 1. 5. 四書の構成比較

以上の書の構成を、次の表7にまとめる。ここでは、ATで仮に「単語集」と名付けたものとAMで中川自身が「字解」と記していた単語に関する項目は同種と見做して「単語集」と見出しを立てている。また、各書の中で用いられている語については引用であるため、鍵括弧で示している。なお、異体字は最も近くWordで利用できる漢字にて示している。

【表7】四書の構成比較

	AT (明10年)	AM (明11年)	BT (明12年)	BM (明13年)
本文の前	—	「緒言」 「教授法大畧」	—	—
本文				
頁数	三十帖	二十九帖	三十三帖半	五十二頁
ルビ	—	—	—	—
割注	—	有	—	有
割注のルビ	—	有	—	有
単語集	本文の後	問題の後 (「博物學教授本字解」)	—	—
頁数	一帖半	五帖	—	—
ルビ	有	有	—	—
図	本文中に挿入	本文の後	本文の後 (「小学讀本改正博物學階梯附圖」)	本文中に挿入
頁数	—	十三帖半	十帖	—
図番号	図ごと (「第一圖」～ 「第四十一圖」)	頁ごと (「第一」～ 「第廿五」)	—	—
問題	—	図録の後 (「博物學階梯教授本問題」)	—	—
頁数	—	十帖	—	—

「階梯」である AT・BT の本文には割注やルビが無く、教授本である AM・BM には本文の中に補足説明を加えた割注が付されている。AT・BM は本文中に図が挿入されており、AM・BT は本文中ではなく、附録として図のみが示されている。問題が付されているのは AM のみであり、表題も AM のみ「附問題字解」と銘打たれているように、他と明らかに異を成している。BM も、BT までは和本の頁番号の振り方であったものが洋本に合わせられていること、図は図番号なく本文中に挿入されており、簡潔な構成となっている点が他の三書と異なる。

単語集が A 群に限られているのは、AM の後に字引が出版されたためであろう。なお、AT 並びに AM に載せられている単語集の違いであるが、AT では見出しがなく、各単語を区切る線で列挙されている。一方の AM では、単語間の線は同様であるが、見出しがあり、「礦物概論ノ部」「土質ノ部」のように項目立てがされている点が異なっている。各項目の語数も異なり、例えば、AM で「礦物概論ノ部」に挙げられているのは 41 語であるのに対し、AT では 4 語である。この差は、AT で挙げられている語は、当時新しく入ってきた理科概念を説明する、新しい理科用語が中心であることに関係する。AT の例⁹⁾を挙げると、「金剛石 [コンコウセキ] (宝石ノ名)」「地質家 [チシツカ] 【チシツガクシヤ】(地質學【上部→興】者)」「分娩 [フンヘン] 【コラウム】」「脱衣 [ダツイ] 【カワヲヌク】」と言ったような語がある。「金剛石」は明らかながら、「脱衣」は現在の「服を脱ぐ」意味とは異なり、「脱皮」の意味で用いられている¹⁰⁾。一方、AM ではこれらの他に「概論 [ガイロン] 【アラマシノロン】」「必須 [ヒツス] 【カナラス】」「利用 [リヨウ] 【ツカイカタ】」など、現代の日常生活において使用する語が含まれている。これらの語は説明が必要と判断されたとすると、当時としては新しい概念ないし漢語であると推察される。このように、当時の語の使われ方と現代への変遷を知るうえで、中川の使用している語は今後大いに研究の余地があるものといえる。

また、図に関しては、ATとAMは本文中に挿入されているか本文後にまとめてあるかという違いはあるが、「第一（圖）」「第二（圖）」と通し番号が振られている点で同じである。BTでは図番号は無いが、「小学讀本改正博物學階梯附圖」と柱に記載があり、枠幅や図の大きさが整えられている。BMでは内容に合わせて本文中に図が挿入されており、図番号は無い。

5. 2. 各書の内容構成

本節では、各書の内容構成を見ていく。なお、見出しの構成に重きを置くため、異体字であるかは触れない。

四書とも、「礦物」「植物」「動物」の三部に分け順に説明を施している。AT・AMでは「礦物概論」「植物概論」「動物概論」と「概論」という表現を用いているが、BT・BMでは「総論」に変化している。本文でもこれによると思しき変化が現れているが、それは章を改めて述べることとし、ここでは便宜上、明治10年版に合わせ「概論」に統一しておく。

「礦物概論」は四書とも五分類である。「植物概論」はAT・AMでは同じ分類による八項目であるが、BT・BMはこれに「海藻類」が加わり、「毒性植物」が「有毒植物」に代わって九項目に増えている。「動物概論」はAT・AMでは同じ分類による七項目であるが、BT・BMは「関節類」が「多節類」に代わり、「蠕蟲類」が削除、「囊蟲類」が「囊状類」に代わって計六項目になっている。

以上から分かるように、AT・AMとBT・BMの表現や分類は基本的に同一である。裏を返せば、AT・AMとBT・BMで差異が生じている部分があるということである。例えば、「動物概論」において「動物」を「有脊椎動物」「無脊椎動物」の二大綱に分けているのは四書に共通しているが、哺乳類や鳥類などの種数はAT・AMでは触れられていない。BT・BMでは具体的な数字が挙げられるようになった。これは、ALの図において動物類が未完成であったのが徐々に整えられてきたことと無関係ではないで

あろう。

次節より、各部の内容を記していく。

5. 2. 1. 「礦物概論」

まず「礦物概論」の部であるが、他の二部と比べて分類の変化は殆ど無い。あるのは、AT・AMでは「金属類」と称していたものがBT・BMにおいて「金類」になった点のみである。

【表 8】 四書の分類項目 1 「礦物概論」

		AT (明 10 年)	AM (明 11 年)	BT (明 12 年)	BM (明 13 年)
礦 物 概 論	土類				
	石類				
	塩類				
	可燃礦類				
	金属類				【金類】

5. 2. 2. 「植物概論」

「植物概論」では、前述の通り、AT・AMでは登場しなかった「海藻類」がBT・BMで加わっている。また、前者で「毒性植物」とされていたものが後者では「有毒植物」となっている。「毒性植物」については、AT・AMの本文において「殊ニ兒童ハ常ニ意ヲ注シ平素見慣レサルモノハ決シテ採食スルコトナカレ」、BT・BMの本文において「豈怖レサルヲ得ンヤ平素見慣レサルモノハ決シテ採食スルコト勿レ」と、児童への注意喚起が成されている。このことから、分類名もより直感的に危険と分かる「有毒」に表現を改めた可能性がある¹¹⁾。

【表 9】四書の分類項目 2 「植物概論」

		AT (明 10 年)	AM (明 11 年)	BT (明 12 年)	BM (明 13 年)	
植物概論	喬木					
	灌木					
	草類	八 「第一」から「第八」		八 「効用ニ從ヒ區別スル」		
		「食用草類」「香料草類」「菜草類」 「色草類」「牧草類」「油草類」「經 濟的草類」「草花類」(その他「雜 草」)		「採茹類」(「更ニ四種ニ分フ」)「葷 辛類」「医薬類」「色染類」「牧料類」 「油料類」「紡織類」「草花類」(そ の他「雜草」)		
	禾類					
	茸櫛類					
	苔蘚類					
	海藻類	一 (記載無し)				
	花	「二十四綱」		「二十四畧綱」		
		「有名ナル林娜氏ハ」「二十四綱ヲ 分類セリ」		「林娜氏ハ此ニ因テ以テ二十四綱 ヲ分類セリ」		
毒性植物				【有毒植物】		

上から見ていくと、「草類」はA群でもB群でも八分類にされているが、B群において波線を引いた箇所が異なる表現のものである。A群では全て「草類」で終わっていたが、B群では草であることは前提となり、中身が分かる分類名となっている。なお、各書でその他扱いされていた「雜草」について、AMでは「品類千萬無数ナリト雖モ皆無功無能ノモノタリ」、BMでは「烟草，…等ノ如キ有用品ヲ除ク外總テ之ヲ雜草ト名ク皆無功無能ノモノタリ」と述べている。ここでも、AMでは「品類千萬無数」と十把一絡げにされていたがBMでは「有用品ヲ除ク」と限定がされている。

基本的にAT・AMとBT・BMの二群で表現が分かれていたが、「花類」を「二十四綱」とするか「二十四綱畧」とするかという点のみ、ATとAM・BT・BMの対立となっている。「林娜氏」による分類である¹²⁾ことを述べる文言はA群とB群の対立になっていることから、単にATで「畧」が抜けており、AMで修正したとも考えられる。AT以外の三書では「二十四綱畧」の内容が示されている。AMでは全名称が列挙されたが、

BT・BMではその特徴によりまとめられ、BMでは「二十四綱花叢之略圖」が示されている。また、BT・BMでは「其他花ニ朝花、午花、夕花、夜花ノ別称アルハ皆其開ク時刻ニ従ヒ名ヲ下セルナリ」と、分類外のことも記されている。

5. 2. 3. 「動物概論」

最後に、「動物概論」である。有脊椎動物、無脊椎動物に大別している点は四書に共通している。前述の通り、A群では七項目であったが、B群では「関節類」が「多節類」に代わり、「蠕蟲類」が削除、「囊蟲類」が「囊状類」に代わって計六項目になっている。「蠕蟲類」について、A群で既に「関節類ニ算入スト雖モ一種異ナル徴候アル」と述べられており、淘汰されたものと思われる。同様に、「囊蟲類」においてA群で三分類されていた内の「植虫」は「珊瑚」のみであったため、B群では「類」としていないのであろう。同じことは、「鳥類」にも言える。A群では九分類だったがB群では一つ少ない八分類となっている。これは、A群に含まれていた「【口+斗】鳥」が削除されたものであるが、「【口+斗】鳥」には「コリブリ」の一つのみが該当していた。このように、一つしかないものは項目立てしなくなっていることが分かる。

A群では「哺乳類」を「動物ノ第一等ニ位シテ最モ完全ナル器械ヲ具シ最モ精微ナル感覚ヲ有セリ而シテ皆四足ヲ有スルニヨリ…」と説明し、最後の「囊蟲類」で「動物ノ最モ下等ナル者ニシテツモ徴候ニ取ルヘキ機関ナシ只多少消化力ヲ有スル囊状物ヲ見ルノミ故ニ囊蟲ノ名ヲ命セリ」と説明しており、器官を位置づけの基準としている。B群でも同様に位置づけの基準は器官である。「哺乳類」を「哺乳類ハ有脊椎動物ニシテ第一等ニ位シ最モ完全ナル機関ヲ具ヘ最モ鋭敏ナル感覚ヲ有セリ而シテ大抵四足アリ…」と述べ、「囊状類」で「無脊椎動物ニシテ第六等ニ位シ諸機関ノ造構最モ不十分ナリ…」と述べている点も、表現に差異はあるもののA群

と同様である。ただし、A群との相違点は、この二類のみならず、他の類でも「第二等」「第三等」と表して序列を明記している点である。

また、本部の最大の特徴としては、前述の通り、B群では具体的な数字が挙げられている点であろう。中川は、明治12年の出版時点で「動物」は「併セテ六類ニシテ二十五萬種」あることを知ったか、あるいは裏付けが取れたのだと思われる。なお、「爬行類」「魚類」のBTはそれぞれ「四類」「七類」と書かれていたが、続く各類の詳細は「五類」「八類」と示されていたことから誤字である。

「植物概論」同様、A群からB群になって変化した語には波線を付している。「動物」の中で最も名称に変化が表れているのは「魚類」「関節類(多節類)」の二つであろう。「魚類」はA群では骨が軟らかいか硬いかという区別しかなく、多くは「硬骨魚」であると述べるに留まっていたが、B群では全く異なるアプローチによる八分類がされている。「関節類(多節類)」に至っては「関節」とするか「多節」とするか項目名から異なっている。「蛛様虫」と「蜘蛛類」が類似しているが、他は異なる。これらの違いからは、A群とB群の数年の内に魚類および虫類への研究が進んだ可能性、あるいは、中川が参考にした資料等がA群とB群で異なる可能性の二つが考えられよう。

このように、『博物学階梯』には当時の生物の分類や進化に関する考え方が投影されていると思われる。特に、植物よりも研究が遅れていた「動物概論」における語の変化は著しく、この部で取り上げられている動物の呼称を四書通して見ていくことで、明治期の用語の推移が分かる可能性が示唆されている。さらに、上野益三(1984a)によると、「脊椎動物」という概念は明治期に日本に入ったものであり、『日国2』においても「脊椎動物」の初出は1874年「ス魯斯氏講義動物学」とされている。入ってきたばかりの「脊椎動物」を中川は使用している点で興味深い。

また、植物においても、例えば本草学での用語と比較することで西洋概

【表 10】四書の分類項目 3 「動物概論」

		AT (明 10 年)	AM (明 11 年)	BT (明 12 年)	BM (明 13 年)	
動物概論	哺乳類	「十二等」		「併セテ六類ニシテ二十五萬種」		
				「十二類」「二千七十七種」		
	鳥類	「二手動物」「四手動物」「手翼動物」 「生食動物」「帶囊動物」「咀嚼動物」 「無歯動物」「多蹄動物」「一蹄動物」 「二蹄動物」「鳍足動物」「鯨状動物」		「有脊椎動物」	「二手動物」「四手動物」「手翼動物」「殺生動物（「更ニ分ツテ二種トス即チ虫食部肉食部」）」「帶囊動物」「咀嚼動物」「無歯動物」「多蹄動物」「一蹄動物」「二蹄動物」「鳍足動物」「鯨状動物」	
		「棲処ノ異同アルヲ以テスルトキハ則チ栖鳥、游鳥、征婦鳥ノ三大部ニ分カル」 「九等」			「棲処ノ異同アルニ從ヒ區別スレハ定栖鳥、游歴鳥、征婦鳥ノ三大部ニ分ル」 「八類」「七千種」	
	爬行類	「嘯鳥」「【口+斗】鳥」「攀鳥」「摯鳥」 「鳩状鳥」「鷄状鳥」「走趨鳥」「涉水鳥」 「游水鳥」		「有脊椎動物」	「嘯鳥」「攀鳥」「摯鳥」「鳩類」「鷄類」 「走趨鳥」「涉水鳥」「游水鳥」	
		「六等」			「四類」「千五百種」 ※ 列举は「第五類」	
	魚類	「龜鼈類」「鱷類」（ワニ）「蛇類」「蜥蜴類」「蝦蟇類」「蝶螈類」		「有脊椎動物」	「龜類」「蜥蜴類」「蛇類」「蝦蟇類」「蝶螈類」	
		「二綱」			「七類」「八千種」 ※ 列举は「第八類」	
	關節類	「軟骨魚」「硬骨魚」		「無脊椎動物」	刺鳍類（BM「刺鳍魚」）、鰻鱈類、固定鬚類、總状鬚類、玳瑁鱗類、横嘴類、圓嘴類、管心類	
		「三等」			【多節類】「四類」	
蠕蟲類	「無血虫」「蛛様虫」「硬皮虫」		「無脊椎動物」	羽虫類（BM「羽蟲類」）、蜘蛛類、蟹蝦類、環蟲類		
				—		
囊蟲類	「三等」		「無脊椎動物」	【囊状類】二類		
	「柔軟蟲」「光線状蟲」「植虫」			「柔軟類」「多肢類」 「植虫モ亦此部ニ算入ス」		

念がいかに取り入れられたか、あるいは東洋の概念が残ったのか、といったことが見えてくるであろう。

6. 本文の四書比較

本章では、AT（明治10年『小学読本 博物学階梯』）、AM（明治11年『小学読本 博物学階梯教授本』）、BT（明治12年『小学読本 改正博物学階梯』）、BM（明治13年『改正増補 博物学階梯教授本』）の四書の本文冒頭を紹介するとともに、互いにどのような共通点、相違点を持つのか概観したい。あくまで冒頭の紹介と本文比較を目的とするため、ATを基準として本文の始まる頁の冒頭から9行目までを対象とし、「教授本」であるAM・BMに記されている割注は含めないものとした。

次の表11は、AT, AM, BT, BMの順に、行に含まれる事項をATに合わせて一覧としたものである。前章までで見たように、AT・AMとBT・BMで表現がそれぞれ類似しているため、A群とB群で色分けをしている。また、表中において「*」が後接されている字は、「ㄗ」「ノ」などの合字または異体字である。本章においては、必要とあれば異体字に触れることとする。

表の左列は版と本文の行数を表しているが、本文のある頁の冒頭には、四書とも共通して本の題名と譯者、註解者、譯纂者など表現は違えども中川重麗の名が記されている。そこで、「AT-00」「AT-01」として題名と中川の名も表に残しておくこととする。

00行目に関して、先の章においても触れたように題名の「小学読本」の字は三書で異なり、AMのみ「孛」という字が用いられている。AT並びにAMでは「小学読本」が二行割とされているが、BTでは「改正」の文字が二行割となっているためか割られずに記されている。BMでは、「改正増補」が二行割となっている。

[表 11] AT・AM・BT・BM 四書の本文比較

	AT: 明治10年(小学読本 博物学階梯)
	AM: 明治11年(小学読本 博物学階梯教授本)
	BT: 明治12年(小学読本 改正博物学階梯)
	BM: 明治13年(改正増補 博物学階梯教授本)
	版一行
AT-00	小学*讀本[2行割2字割]博物学*階梯
AM-00	小学讀本[2行割2字割]博物学階梯教授本
BT-00	改*正[2行割]小学*讀本博物学*階梯
BM-00	改*正増*補*[2行割2字割]博物学階梯*教授本
AT-01	西京 中川重麗 譯
AM-01	西京 中川重麗 註解*
BT-01	西京【口→日】 中川重麗 譯築
BM-01	京都 中川重麗 註解
AT-1	○礦物概論
AM-1	礦物概*論
BT-1	○礦物総【糸→糸】論
BM-1	礦物総【糸→糸】論
AT-2	礦物ハ即チ一種ノ天造物ナリ其体タルヤ要スルニ
AM-2	礦物ハ即*チ一種ノ天造物ナリ其体タルヤ要スルニ
BT-2	礦物ハ一種ノ天造物ニシテ*其体タルヤ総【糸→糸】テ
BM-2	礦物ハ一種ノ天造物ニシテ*其体タルヤ総【糸→糸】テ
AT-3	只同シ種類*ノ質ヨリ成リ食物ヲ採取シ之レヲ消化
AM-3	只同シ種類ノ質ヨリ成リ食物ヲ採取シ之レヲ消化
BT-3	全身同質ヨリ成立シ滋養ノ料ヲ取り之レヲ消化
BM-3	全身同質ヨリ成立シ滋養ノ料ヲ取り之レヲ消化
AT-4	スル等【竹→竹】ノ器械ヲ有セス故ニ生活發*育ノ機*カラ欠キ
AM-4	スル等ノ器械ヲ有セス故ニ生活發*育ノ機*カラ欠キ
BT-4	スル等【竹→竹】ノ機*関*ナシ故ニ動物*物ノ如ク内ヨリシテ生長セス
BM-4	スル等【竹→竹】ノ機関*ナシ故ニ動物ノ如ク内ヨリシテ生長セス
AT-5	只同シ種類*ノ物質ヲ外部ニ附着シ以テ増*大ヲ致*ス
AM-5	只同シ種類*ノ物質ヲ外部ニ附着シ以テ増*大ヲ致ス
BT-5	只地中ニ在テ外部ヨリ同シ物質ヲ附着シ増大スルコト*アル
BM-5	只地中ニ在テ外部ヨリ同シ物質ヲ附着シ増*大スルコト*アル
AT-6	ノミ夫ノ異*ナル種類*ノ質ヨリ成リ種々ノ器械ヲ具*
AM-6	ノミ夫ノ異ナル種類*ノ質ヨリ成リ種々ノ器械ヲ具
BT-6	ノミ
BM-6	ノミ
AT-7	ヘテ生活シ内部ヨリ成長スル機*カラ有スル動植*ニ
AM-7	ヘテ生活シ内部ヨリ成長スル機*カラ有スル動植*ニ
BT-7	動植*ニ物ニ
BM-7	動植ニ物ニ
AT-8	比スレハ大ニ運庭スル所*アリ是レ即チ礦物ヲ無
AM-8	比スレハ大ニ運庭スル所*アリ是レ即*チ礦物ヲ無
BT-8	比フレハ大ニ異*ナル處*アリ是レ則*チ世ニ礦物ヲ無
BM-8	比フレハ大ニ異*ナル處*アリ是レ則*チ世ニ礦物ヲ無
AT-9	機*体ト名ツケ動植*ヲ有機*体ト名クル所*以ナリ
AM-9	機体ト名ケ動植*ヲ有機体ト名クル所*以ナリ
BT-9	機体ト謂ヒ動植*ヲ有機体ト謂フ所以ナリ
BM-9	機体ト謂*ヒ動植ヲ有機体ト謂*フ所以ナリ

01 行目では、BT で異体字が用いられているものの、BM を除いて「西京」の文言が使われており、BM のみ「京都」とされている。4 章の繰り返しになるが、中川の表現がそれぞれ異なるものの、AT の「譯」に対し BT の「譯纂」は類似性があると思われ、AM と BM では異体字が用いられてはいるが同じ「註解」と表されている。この点から、「階梯」と「教授本」による使い分けをなしていたのではないかと考えられる。

本文 1 行目として「礦物」の見出しが続く。ここでは、AT と AM が「礦物概論」、BT と BM が「礦物総論」と称している。形式としては、AT と BT が 1 字下げて「○」の記号を用いている点で類似している。

2 行目以降は、明らかに AT と AM、BT と BM で表現が二つに分かれていることが分かるであろう。合字ないし異体字を示す*記号を除外すると、AT と AM、BT と BM はそれぞれ全く同じ表現をしているのである。

以上のことを整理する。表 11 の 01 行目において、「階梯」では「譯」「譯纂」、
「教授本」では「註解」の表現が用いられている。また、AT、AM、BT では所在地として「西京」が、BM では「京都」の文言が用いられている。本文 1 行目において、表現としては「階梯」において「概論」、
「教授本」において「総論」の文言が用いられており、見た目としては「階梯」に統一性が見られる。2 行目以降は、異体字を鑑みなければ AT・AM、BT・BM でそれぞれ全く同じ表現がなされている。

2 行目以降の文言が A 群と B 群の二種類であることから、BM に「小学読本」の文言は含まれていないが BT の延長線上に著されたものであると判断できる。一方において、A・B 群ともに、10 行目以降も同一表現であるのかは今後調べていく必要がある。また、本章では対象外とした割注は「教授本」のみに記されているのであるが、A 群から B 群への移行過程や『博物学階梯』の全体を捉える際には割注も含めた比較が肝要となろう。

その他、A 群で「概論」だったが B 群で「総論」と変わったことと、本文 2 行目最後の表現が A 群では「要スルニ」だったが B 群で「総テ」と変わっ

ていることは共通した変化であるのではないだろうか。B群において「総論」としたのが先か「総テ」と表したのが先かは不明であるが、いずれにせよ文言を統一させようとしたように思われる。

また、本稿の冒頭において、中川が当時としては新しい語を用いていたことに言及したが、試みにこの9行に登場する漢語を『日国2』で引く。漢籍を出典とする語、800年代に初出用例がある語もあるが、この9行だけでも1800年代以降が初出とされている語が12語あり、いずれも1870年以降の用例であった。その12語と、初出は古いものの二つ目の用例が1870年前後の語を併せた15語を表12にまとめた。

左列の番号は、15語の通し番号である。「箇所」は、本文の何行目に登場しているかを示している。A・Bのみの表記となっているのは、AT・AMとBT・BMがそれぞれ同じ語を使用しているためである。「語」の右の「初出年」「初出用例」は、『日国2』における初出を記している。A・Bともに使われている語は1・2・10・11・12・14・15番の7語あり、A群で使われたがB群では使われていない語は3・6・7・13番の4語、逆にB群のみで使われている語は4・5・8・9番の4語ある。

備考欄に「★」を付している7番「機力」、14番「無機体」並びに15番「有機体」の3語は、『日国2』に『博物学階梯』が用例として挙げられている。7番「機力」を『大漢和辞典』修訂第二版（以下『大漢和修訂2』）ならびに漢語大詞典編集委員会『漢語大詞典』（以下『漢語大詞典』）で調べると、いずれも立項されていなかった。

『大漢和修訂2』では14番「無機体」、15番「有機体」は立項されていたが、『漢語大詞典』では15番のみ立項されていた。試みにこれら2語の『日国2』『大漢和修訂2』『漢語大詞典』の記述を並べてみたい。『博物学階梯』の用例は冒頭に◎印を付している。なお、『大漢和修訂2』は繁体字と歴史的仮名遣いが、『漢語大詞典』は簡体字が用いられているが、本稿では便宜上、前者は現代仮名遣いにしたうえで、いずれも常用漢字を使用する。

【表 12】冒頭 9 行における漢語（『日国 2』による初出が 1870 年以降の語を中心に）

番号	箇所	語	初出年	初出用例	備考
1	A-2 B-2	礦物	1874-75	『日本教育策』森有礼編	
2	A-2 B-2	天造物	1873-74	『文明開化』	
3	A-3	採取	・(後漢書) ・1905	・『後漢書』馬援伝 ・「鉱業及砂鉄採取業に関する手数料制(明治三八年)」	☆
4	B-3	同質	(1) 1874 (2) 1870-71 頃	(1) 『明六雑誌』一九号「尊異説」阪谷素 (2) 『百学連環』西周	
5	B-3	滋養	(2) ・1566 ・1869	・『全九集』四 ・『西洋聞見録』村田文夫	☆
6	A-4	器械	(6) 1862	『七新菜』	
7	A-4	機力	(2) ・1876-77 ・1877	・『博物図教授法』安倍為任 ・『博物学階梯』中川重麗	★
8	B-4	機関	(5) 1862	『英和对訳袖珍辞書』	
9	B-4	動植物	1873	『小学読本』田中義廉	
10	A-5 B-5	外部	(1) 1874-76	『西洋道中膝栗毛』総生寛	
11	A-5 B-5	附着	(2) 1876	『改正増補物理階梯』片山淳吉	
12	A-5 B-5	増大	1872	『医語類聚』奥山虎章	
13	AT-7	内部	(1) 1794	『地方凡例録』	☆
14	AT-8 BT-8	無機体	・1847 ・1869 ・1877	・『病学通論』 ・『改正増補和訳英辞書』 ・『博物学階梯』中川重麗	★
15	AT-9 BT-9	有機体	(1) ・1873 ・1877	・『附音挿図英和字彙』柴田昌吉・子安峻 ・『博物学階梯』中川重麗	★

14 番「無機体」

『日国 2』

無機物からなり、生物としての機能を持たない組織体。

*病学通論〔1847〕一「其一を無機体と云ふ」

*改正増補和訳英辞書〔1869〕「Inorganic 無機体（ムキタイ）ノ」

◎博物学階梯〔1877〕〈中川重麗訳〉「異なる種類の質より成り種々の

器械を具へて生活し内部より成長する機力を有する動植に比すれば大ひに逕庭する所あり。是れ即ち礦物を無機体と名づけ動植を有機体と名くる所以なり」

『大漢和修訂 2』

生活機能をもたない物体。無機物。金・石・土・水など。有機体の対。

『漢語大詞典』：立項なし

15 番「有機体」

『日国 2』

(1) 有機物からなり、生活機能をもつ組織体。生物体を他の物質系から区別するという語。

* 附音挿図英和字彙〔1873〕〈柴田昌吉・子安峻〕「Organic bodies 有機体（イウキタイ）」

◎ 博物学階梯〔1877〕〈中川重麗訳〕「是れ即ち礦物を無機体と名づけ動植を有機体と名くる所以なり」

(2) 多くの構成メンバー、構成要素からなり、それらが互いに関連し依存しあうことで成り立っている組織。組織立てられた統一体。

* 将来之日本〔1886〕〈徳富蘇峰〕九「それ国家は人民を以て組織したる一大有機体なり」

* 門〔1910〕〈夏目漱石〕一四「道義上切り離す事の出来ない一つの有機体（イウキタイ）になった」

『大漢和修訂 2』

① 有機物で組成される体。生活機能を持っている物、即ち動植物。有

機物。無機体の対。

- ②宇宙・国家等の如く各部分が一定の目的の下に統一され、部分と全体とが必然的關係を有するもの。有機的団体。

『漢語大詞典』

- ①具有生命的個体的統稱、包括植物和動物。
②指事物構成的各個部分相互關連、像生命的個體一樣具有統一性敵物體。朱光潛《芸文雜談・慢慢走、欣賞阿！》：“一篇好文章一定是一個完整的有機體、其中全體與部分都息息相關、不能稍有移動增減。”

14番「無機體」では、『日国2』の「生物としての機能を持たない」に『大漢和修訂2』で該当するのは「生活機能をもたない」という記述である。

15番「有機體」では、『日国2』においても『大漢和修訂2』と同様「生活機能」という表現を用いている。『漢語大詞典』では、植物と動物を含んだ生命体の総称であるとしている。なお、②に用例として挙げられている作品の出版年代は不明であるが、朱光潛は1897年生、1986年没であり、『日国2』の用例より遅いことが推定される。

『博物学階梯』の用例は、いずれも「礦物を無機體と名づけ動植を有機體と名くる所以なり」と同じものであるが、「礦物」「動植」物と具体性があり、短く分かりやすい用例と言えるであろう。

上記の三例以外にも『博物学階梯』が『日国2』の用例として挙げられている例もあるのだが、紙幅の都合、稿を改めることとする。

また、表12中の備考欄に「☆」を付している3番「採取」、5番「滋養」は、最初の出典はそれぞれ後漢書、1566年の『全九集』と古いのだが、その次に出ている用例が1877年の『博物学階梯』と同年代以降であるため、表に加えている。特に「採取」は、二つ目の用例である「鋳業及砂鋳採取業に関する手数料制（明治三八年）」は1905年のものであるが、『博

『生物学階梯』はそれより凡そ30年早く使用している。そこで、国立国語研究所による「日本語歴史コーパス(CHJ)」で「採取」を語彙素検索すると、145件該当があり、その中で最も早いのは1874年の『明六雑誌』に収録されている「拷問論(二)」(津田真道)であることが分かった。15件が1800年代の、111件¹³⁾が1905年までの用例である。用例の意味等を一例ずつ精査する必要はあろうが、『日国2』で挙げられている1905年の例より早く使われている例が見られることがいえる。

なお、13番「内部」の初出は1794年とされているが、10番「外部」との対義語であるため、載せている。「内部」と同時期に「外部」という語が出現したかというそうではなく、1874年から1876年と80年ほど遅れている点が興味深い。

同じものを示すのにA群とB群で異なる語を使っている例として、本文4行目の「器械」「機関」がある。人を含めた動植物が有する「消化」するなどの場所を何というかであるが、A群では「器械」(6番)という語が使われ、B群では「機関」(8番)という語が使われている。現代では「器官」を使用するが、明治時代初期は定まっておらず、揺れがあったことが『日国2』に記されている¹⁴⁾。

このように、『生物学階梯』は近代漢語や新しい用法の語を見つけ出す手段として有用である。中川自身がどのようにそれらの語を会得したのかは別途探るところであるが、『生物学階梯』の目的が教科書として児童に示すものであることから、ある程度一般に認知された言葉が使われていると推測される。また、浸透していないと判断される語は「字解」に挙げられており、当時の使用語彙、理解語彙を知る一助となるであろう。

7. 終わりに

中川重麗は、自身が校閲を行ったものも含め、教科書や理学書を明治

10年から同22年の間に様々出版している。国会図書館データベースより分かるものとしては、『日月地球 渾転儀用法』『博物学階梯』『万有七科理学¹⁵⁾』『小学理学階梯字引』『工業小学』『農家小学読本字解』『小学植物標本説明書』『新式理科読本字引¹⁶⁾』『女子之務¹⁷⁾』の九種である。多いように思えるが、中川の名は広く知られているわけではなく、日本語学の点から研究が為されたものは殆どない。一方、特に6章で触れたように、中川は当時としては新しい語を少なからず使用しており、明治初期の語彙研究として対象とする価値があるといえる。さらに、『博物学階梯』は中川重麗一人が出版人となっており、明治10年から13年の間に改訂が加えられて出版されたものである。この点から、『博物学階梯』における異同が、初期の理科教科書における語の変遷を辿る一助になると期待される。

今後の課題としては、中川自身の学術背景を追うこと、各語の詳しい考察、『博物学階梯』の出版年による使用語の違いなどが挙げられる。最後に、本稿では対象としなかったAL、BLの字引と字解についても書誌情報をまとめたい。

さらに、3章で触れたように、中川自身は『博物学階梯』を、“Das Buch der Natur”第2巻を基にしていると述べていることから、同書との比較を行うことと、“Das Buch der Natur”を邦訳した『万有七科』のうち、『博物学階梯』と重なる「物体学」（「鉱物学」「植物学」「動物学」）においてどのような語が使われているか、『博物学階梯』との関連性を調べることも必要であろう。それにより、『博物学階梯』の四書の差異、語の変遷がさらに明確になるといえる。語彙の考察では、6章等で試みたように中国における語の使用と比較すること、原典となるドイツ語との比較等が肝要となってくるであろう。

最後に、『博物学階梯』と同様に明治初期の教科書である『物理階梯』をコーパス化した田中牧郎（2016）で挙げられているように、中川教科書と他の教科書や雑誌との語種比較、教科書に特徴的な語彙などを調べてい

くことも考えられる。

[注]

- 1) 理科系教科書の歴史は、北村静一（2006）「理科教科書」に詳しい。
- 2) 西村（1995）においては、「植虫類」に相当する名称や概念がなかったことを例として、東アジア本草学と西欧博物学の違いを述べている。
- 3) 「コト」は合字である。
- 4) 2. 2節で触れたように、宇田川榕菴が分類した「三有究理学」（「動学」（動物学）、「植学」（植物学）、「山物の学」（鉱物学））とも重なる。
- 5) AMには「緒言」「教授法大畧」の最後に「明治十年九月於張弛館 注解者 識」とあり、続く図と「博物學階梯教授本問題」に終了の記載は無いが、最後の「博物學教授本字解」には「博物學教授本字解終」と書かれている。
- 6) なお、BTには巻末に「附圖」があるが、そこにはAM同様終了の記載は無い。ただし、「京都銅版彫刻司 精愛堂石田旭山社中刻」（「刻」は異体字）と記されている。
- 7) 京都市学校歴史博物館における、番組小学校創設 150 周年記念特別展「番組小学校の軌跡—京都の復興と教育・学区— その4 完成」では、明治元年に他の書展関係者らとともに小学校設立費を寄付していたとの説明が示されていた。
- 8) 字体ではなく内容に着目するため、異体字は常用漢字に振り替えている。
- 9) ルビの構成はいずれの書でも共通し、「語 [] 右側ルビ, 【 】 左側ルビ, () 割注」である。
- 10) 第 214 回青葉ことばの会では、『日国 2』で調べると「脱衣」には人が「衣服を脱ぐこと。だつえ」の意味しか無く、動物が自らの皮を脱ぎ捨てる「脱皮」を「脱衣」と表しているのは珍しいとご指摘を頂いた。この用法に

ついて、今後調査していきたい。

- 11) なお、『日本国語大辞典』第二版によると、「毒性（ドクセイ）」は1874年（文部省「小学化学書」）が、「有毒（ユウドク）」は1872年（「新聞雑誌～四九号・明治五年」）がそれぞれ初出であり、中川が用いたいずれの語も当時にしては新しいことが分かる。『大漢和辞典』修訂第二版では、「毒性」は立項されておらず、「有毒」は『春秋左氏傳』僖公二十二年（紀元前638年）を出典としている。ただし、「有毒」は漢語大詞典編集委員会編（1988～）『漢語大詞典』における立項はなかったため、今後調べていきたい。
- 12) カール・リンネ（1707～1778）を指す。宇田川榕菴は『植学独語』のなかでリンネ分類を解説している。
- 13) 著者数では六名である。
- 14) 「器械」「機関」「器官」の考察は稿を改めて述べたい。
- 15) フリードリヒ・シュドレル著、中川重麗訳。
- 16) 小石碌郎著、中川重麗校閲。
- 17) ルイゼ・ブュフネル著、中川重麗訳。

【謝辞】本研究にあたり、鈴木栄樹氏（京都薬科大学名誉教授）には、京都での中川の事績調査において、種々御教授を賜った（墓所がある高山寺等関係地案内、御所蔵書の閲覧、経歴・事績に関する情報 他）。深く感謝申し上げます。

【付記1】本稿は、学習院大学東洋文化研究所2018年度一般研究プロジェクト「日本近代漢語表現の形成とアジア漢語圏近代漢語との比較研究」（代表：安部清哉）の研究成果の一部である。

【付記2】本稿は、次の口頭発表を経ている。第214回青葉ことばの会口頭発表、題目：「近代語資料としての明治理科教科書・中川重麗『博物学

階梯』—明治10年刊初版を中心に—, 発表者: 安部清哉・伊藤真梨子・蓮井理恵・渡辺陽子, 2019年9月21日, 会場: 学習院大学 北2号館。
 [付記3] 本稿は, 安部清哉の次の科研費の研究成果も含む。日本学術振興会科学研究費2017—2019年度基盤研究C(基金), 課題番号: 17K02785, 代表: 安部, 「古典日本語の連語構成・詞辞複合表現形式の通時的基礎研究」。

[使用文献]

中川重麗著

明治10年11月『小学読本 博物学階梯』

明治11年4月『小学読本 博物学階梯教授本』※

明治11年12月『小学読本 博物学階梯字引』※

明治12年9月『小学読本 改正博物学階梯』

明治12年11月『改正博物学階梯字解』※

明治13年6月『改正増補博物学階梯教授本』※

※の文献は, 国立国会図書館デジタルコレクションに公開されているものを使用した。

[参考文献]

一般社団法人 教科書協会「教科書制度 Q&A Q.20. 我が国の教科書の歴史について説明してください」<http://www.textbook.or.jp/question/answer/a20.pdf> (最終閲覧日: 2018年10月22日)

上野益三(1973)『日本博物学史』平凡社

上野益三(1984a)「明治大正期におけるわが国の動物学の発達」『博物学史論集』八坂書房

上野益三(1984b)「博物学としての昆虫学」『博物学史論集』八坂書房

宇田川榕菴『植学独語』国立国会図書館デジタルコレクションにて公開

海後宗臣・仲新・寺崎昌男(1999)『教科書でみる近現代日本の教育』東

京書籍

梶山雅史 (1988) 『近代日本教科書史研究—明治期検定制度の成立と崩壊—』 ミネルヴァ書房 (https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/68906/2/D_Kajiyama_Masafumi.pdf)

漢語大詞典編輯委員会 漢語大詞典編纂所 (1988～1990) 『漢語大詞典』
漢語大詞典出版社

北村静一 (2006) 「理科教科書」『近代日本の教科書のあゆみ—明治期から現代まで—』 (第1部 明治期から昭和戦前期の変遷), 滋賀大学附属図書館, サンライズ出版

京都市学校歴史博物館編 (2016) 『学びやタイムスリップ 近代京都の学校史・美術史』 京都新聞出版センター

京都市教育委員会・京都市学校歴史博物館編 (2017) 『京都学校物語』 京都通信社

小林清市 (2003) 『中国博物学の世界 「南方草木状」「齊民要術」を中心に』 農文協

今野真二 (2018) 『ことばでたどる日本の歴史 幕末・明治・大正篇』 河出ブックス

小学館 (2002) 『日本国語大辞典』 第二版

清水貞夫 (2015) 『四明中川重麗小事典』 現代文藝社

白井光太郎 (1891) 『日本博物学年表』 丸善書店

杉本つとむ (1985) 『江戸の博物学者たち』 青土社

杉本つとむ (2011) 『日本本草学の世界—自然・医薬・民俗語彙の探究』 八坂書房

田中牧郎 (2017) 「明治初期教科書『物理階梯』のコーパス作成による語彙の考察」『言語資源活用ワークショップ2016 発表論文集』 1, 国立国語研究所

東京書籍株式会社社史編集委員会編 (1980) 『近代教科書の変遷』 東京書

籍七十年史』東京書籍

西村三郎 (1995) 「東アジア本草学における「^{ゾーフィータ}植虫類」 - 西欧博物学との比較の一資料として -」山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』上, 思文閣出版

西村三郎 (1999) 『文明のなかの博物学 西欧と日本』上・下, 紀伊國屋書店

日蘭学会編 (1984) 『洋学史事典』雄松堂出版

諸橋轍次 (1989) 『大漢和辞典』修訂第二版, 大修館
文部科学省「学制百年史 二 近代教育制度の創始」

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317567.htm (最終閲覧日: 2018年10月22日)

矢部一郎 (1984) 『ライブラリ科学史—6 江戸の本草』サイエンス社
立命館大学「近代京都オーバーレイマップ」

<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/>
(最終閲覧日: 2018年11月27日)

立命館大学「バーチャル京都」

http://www.dmuchgis.com/virtual_kyoto/ (最終閲覧日: 2018年11月27日)

[参考論文]

伊藤真梨子 (2019.3a) 「語基「特」を含む漢語の幕末・近代における拡大」『人文』17, 学習院大学人文科学研究所

伊藤真梨子 (2019.3b) 「『改正増補 博物学階梯教授本』(1880)の語彙」『国語国文学会誌』62, 学習院大学文学部国語国文学会

伊藤真梨子 (2019.3c) 「近代の「特徴」「特長」「特色」語彙の変遷について」, 第212回青葉ことばの会口頭発表, 2019年3月7日(土), 八王子学園都市センター第2セミナー室

- 蓮井理恵 (2019.3) 「近代漢語「自然物」「天然物」「天産物」「天造物」類の変遷と意味分析—」『人文』17, 学習院大学人文科学研究所
- 渡辺陽子 (2019.10) 「「生」「活」を造語成分とし共通語基をもつ近代的類義二字漢語—「生計—活計」「生氣—活気」等10組—」『学習院大学人文科学研究論集』28, 学習院大学大学院人文科学研究科
- 伊藤真梨子 (2019.9) 「「特色」「特徴」「特長」の語史—近代に求められた語基「特」が表してきたもの—」, 2019年語彙研究会大会(第17回大会) 口頭発表, 2019年9月14日, 明治大学駿河台キャンパス
- 伊藤真梨子 (2019.10) 「「特質」と「特性」の語史—明治30年代の日本語の動揺から現代へ—」, 日本近代語研究会2019年度秋季発表大会口頭発表, 2019年10月25日, 仙台国際センター 会議棟